

事例47

より豊かに自分を表現する子 ～ 「話すこと・聞くこと」を中心にして ～

小松市立月津小学校

1 事例の概要

(1) 研究の内容

子どもの実態から、たどたどしくても『自分の言葉で考えや思いを伝え合える子』『お互いのよさを認め合える子』を目指し、学校生活に生かされる「話す力」「聞く力」を育てたいと考え、学校の文化づくりを土台とした研究構想を立てた。その構想を実現するためには、教師も子ども達も共通に「あのゴールをめざしたい!」という「目標」を明確にもち、話したい、聞きたいという「意欲」をもって、学習を進めたいと考えた。そこで、昨年度より、「目標」と「意欲」を主軸に据え、目標と意欲が相互に高められることを意図しながら、様々な取り組みを進めている。さらに、昨年の取り組みの成果として、話す力を書く力につなげることができたことから、本年度は、話す力と書く力の相互の関連を意識して研究を進めている。

A-1 研究の構想図

A-2 めざす子ども像

(2) 研究の方法

6年間を見通した「話すこと・聞くことの系統表」や「各学年の年間計画表」を作成し、本校としての取り組みの重点を決め、見通しをもって実践する。

また、研究推進委員会が中心となり、低・中・高学年の各実践部や、企画部（学校文化部・基礎基本部・情報発信部）との連携を図りながら研究を進める。

B-1 話すこと・聞くことの系統表

B-2 研究の組織

2 実践内容

「目標」と「意欲」を主軸にした取り組みとして、以下のような取り組みを進めた。

(1) 学習指導案の工夫

目標と意欲を、私たち教師が、常に意識して研究を進めていきたいという思いから、指導案の中に、「目標にせまるための支援」と「意欲を高めるための支援」を表記した。単元計画の中に表記することで、授業者が何のために支援するのかが意識でき、子ども達の意欲を高め、目標にせまらせるためには効果的だった。

(2) 他の単元・他の教科等との関連

国語科の中の「読む」単元や「書く」単元と関連させたり、総合的な学習や社会科などから題材をつなげたりして、子ども達に伝えたいと思える単元や題材を考え、相手意識や目的意識を明確にする工夫をしてきた。特に、国語科の読む単元や書く単元とつなげて題材を考えたことは、話す力・聞く力の向上に効果的であったばかりでなく、書く力を高めることもできた。そこで、本年度は、話すことと書くことの関連を意識して研究を進めている。

(3) 学習すごろくの活用

他の単元や他の教科を関連させるため、取り組む期間が長くなっても目標を見失わないように、学習すごろくを活用した。学習すごろくを活用することで、子ども自らが学習の見通しをもち主体的に学習を進めら、教師と子ども達がゴールを共有できると考えたからである。

当初、学習すごろくのゴールは活動を示すだけであったが、具体的な学習のポイントを示し迷ったときの指針とすることで、子ども達の主体的な学習を促すことができた。

(4) 「つなぐ」を意識した取り組み

子ども達が、伝え合う中で友達の考えや意見を聞き、「友達の話をつなぐ」「自分の体験とつなげて意見を言う」「既習の学習とつなげて話す」「友達と自分の考えとを比べて話す」ことを意識させてきた。また、教師が、「教材をつなぐ」「教師が子どもの話を聞き取り、つなげて、返す」ことなど、「つなぐ」ための教師の役割についても考えてきた。

(5) 学習形態の工夫

目標にせまるために効果的な学習形態を考え、1時間の授業のなかでも、ペア、グループ、一斉など様々な学習形態を取り入れてきた。ペア、グループでの話し合い活動の後には、全員でそのふり返りを行い、学びを共有して、次の学習へつなげていった。

(6) 保護者との連携・啓発

話すこと・聞くことでの学習のめあてを保護者に知らせ、子どもの話を聞いていただいた。そのことにより、保護者は、言葉をかける観点を理解することができ、めざす子どもの姿を教師と共有することができた。子ども達は、家族に誉められることで、学校での活動に自信を持ち意欲的に取り組むことができ、その結果、目標にも近づくことができた。

C-1 単元計画・評価計画

C-2 指導案

C-4 学習すごろくの例

C-3 他の単元・他の教科と関連を図った例

C-5 保護者との連携の資料

3 成果と課題

(1) 成果

国語科の他の単元・他の教科等との関連の工夫では、それぞれの単元や教科のねらいを明確にすることの大切さ、そして、そのねらいを達成するための適切な言語活動を準備し活動の意味を明確にすることの大切さに気付くことができた。また、学習すごろくの活用では、教師と子ども達がゴールを共有しながら主体的に学習を進めることができ、「目標」実現のための「意欲」化につなげることができた。

さらに、つなぐことを意識した授業展開では、対話型の授業により、「話す力」以上に「聞く力」の大切さに気付くことができ、『お互いのよさを認め合える子』という目指す子ども像に近づくことができた。保護者と連携することでは、学習に対する子ども達の意欲が高められたと同時に、保護者の学校研究に対する意識も高められた。

(2) 課題

今後は、以上のような本年度の成果を継続し、さらに、対話型の授業を中心にして、話す力・聞く力と書く力や読む力との関連を意識しながら研究を進め、量的・質的な国語力全体の向上を目指し、伝え合う力を高めていきたいと考えている。

そして、豊かな心をもった子ども達が互いに豊かな人間関係を育みながら、『より豊かに自分を表現できる』の姿を求め、研究を前進させていきたいと考えている。